

幼児の教育



家庭-保育所-幼稚園

'97年 9月号



創業90年・キンダーブック創刊70年記念出版

弊社は明治40年、幼児教育・保育への寄与を目指して東京・飯田橋の地に誕生しました。以来、皆様のご支援をいただきながら今年創業90年を、また、昭和2年誕生の「キンダーブック」は創刊70年を迎えることとなりました。

この創業90年・創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源『現代保育用語辞典』を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご用意いただければ幸いです。

基本的な保育用語約2,000語を精選、50音順に配列し、解説。

現代 保育用語辞典

付：外国の保育教育 40か国

保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通して、これからの保育のあるべき姿を分かりやすく示す辞典。みだし語は英語訳付きで、今の保育に直結する語釈をポイントとし、引きやすく、意味がすぐ確認できる辞典。

編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博
上田礼子・大戸美也子・大場幸夫
小林美実・中村悦子・萩原元昭

執筆者

保育及び隣接分野の最高権威者
330名が参画。

A5判・592頁

定価7,767円＋税



好評発売中

キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第96卷 第9号



幼児の教育 目次

——第九十六卷 第九号——

© 1997
日本幼稚園協会

ある日……………(4)

二十一世紀にむけて幼児教育を考える (14)

折り返しの世紀に向けて……………森下はるみ (6)

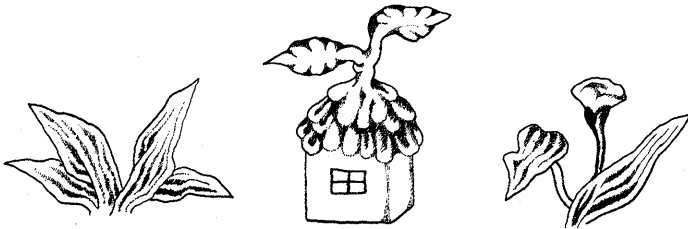
娘が「選んだ」幼稚園―娘の幼稚園を決めるにあたって―…倉田 知子 (10)

子どものいる暮らし―男・夫・父

子どもが出来て子どものありがたさを知る……………西原 彰宏 (16)

「児童の世紀」を振り返る―その三―……………本田 和子 (22)

韓国の伝統芸能の今……………小林 美実 (30)



子どもの世界の表と裏……………津守 真…(36)

子ども時代と私(8) 私の中学生時代―戦時中の三年間(2)……………湯沢 雍彦…(42)

夢の日々(一) 二人で入園し、三人で卒園……………大多和 檀…(48)

子どもの本から 秋風が教えてくれた木の秘密……………美谷島いく子…(52)

心に添う……………田中三保子…(56)

ある日の育児日記から(8)……………佐藤 和代…(63)

表紙絵／小田原千佳子

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット／彌永たたえ「続・快晴」

編集委員／田代 和美・伊集院 理子・上坂元絵里

編集部／仲 明子



ある日





撮影・平野 清

二十世紀にむけて幼児教育を考える(14)

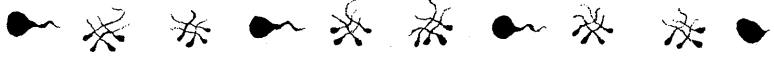
折り返しの世紀に向けて

森下はるみ

二十一世紀に生きる子どもたちのことを想うと、なぜか心が重くなる。それはちやうど、借金をどさりと子どもに残したまま、逝ってしまおうとする親の心境に似ているからかもしれない。谷川俊太郎の詩に、「遠くからみると」というつぎのような一節がある。

驚いたことに遠くから見ると

地球はちっとも疲れているように見えない



まだ手おくれじゃないんじゃないか

今のうちに人類が減びさえすれば

きつと地球は天命をまっとう出来る

もし本当に地球が大切なら

野牛やシロナガスクジラに譲ったほうがいい

人類の物質的繁栄とひきかえに、〈病む〉地球を残すはめになった私たち二十世紀人。性や消費に対してだけある程度反応するにすぎない巨大な実験動物（エルヴィン・シャルガル『未来批判』）といわれる二十世紀人。懸命によかれとおもってやってきた産業も科学も開発も、繁栄とひきかえに自己崩壊を内包する過程だったことをあちこちに露呈させながら、私たちの世紀は終わりに近づいている。

宇宙からみると、地球は青く美しく輝いているという。海や光合成をする生物圏が表面をおおうためだが、そこに一万年程前、農耕牧畜によって人工の生態系をつくり始めた人間圏が出現し、地球は大きく変貌したと比較惑星学の松井孝典はいう。その結果、地球上のあちこちに、同じ大きさの生物の十倍、ちょうどゾウと同じエネルギー代謝量を必要とする五十億以上の個体がすむことになったと。おかげで、二十世紀後半から、物質消費と環境汚染の加速がますます高まった。もし地球の天命をまっとう

させようと願うなら、あるいは天命は無理でも延命を願うなら、人間圏とその代謝様式の抑制がこれからの課題になる。

ところで二十世紀初頭の子どもはどんなだったのだろう。『幼児の教育』創刊年（一九〇一）に寺内頤による鹿児島島の小学一年生六十九人の調査がある。その幾つかを示す。

自分の名を知っている (49)

自分の姓を知っている (51)


一より十まで数えられる (56)

最も悲しきこと 人の打たれし (3)・馬豚の死 (3)

最も恐ろしきこと きつね (26)・犬 (5)・亡魂 (4)

最も好きな食べ物 飯 (19)・菓子 (11)・米の飯 (6)

なんと素朴な曾祖父母世代の子ども時代か。一〇〇年前はもちろん、テレビも絵本も色あざやかな玩具もない、デイズニールランドも自動車もない、ジュースもケーキもない、水道やガスや電話もない、ワクチンも保健施設もないと“ないないづくし”の子ども時代だったことがうかがえる。しかし、何かを得たということは、その他の何かを失ったということ。一〇〇年間の“あるあるづくし”への変貌過程で失ったものも



たくさんある。だからといって後戻りは出来ないが、失ったものうち、かけがえないものを見直し、回復させることは、そのまま二十一世紀への方向につながる。

研究教育職をあっさりやめ、四十歳で「花屋」になった友人がいる。そのIさんによると、商売はきつい、大きな発見は、花を求めにくる時、お客さんはみなおだやかな、あるいは幸せな表情をしている人が多いことだという。草花や鳥の声になぐさめられたり、山や湖にむかって生きる喜びをおぼえるのも、それとかかわった時の状況や原体験、あるいはもっと人類以前から組み込まれた体験の裏打ちがある。保育施設とはいっ、何を、どのように教えるかの実践の場でもある。教育効果を出来高や効率だけではかることなく、子どもの生活ベースや体験を軸にしたスローな熟成の間がもっとあってもいいのではないか。

うさぎおいし　かのやま、こぶなつりし　かのかわ……が、「故郷愛」につながるように、人への信頼と自然の生態系とのかかわりが、やがて「青い地球」の存続を願う心につながるのではないか。

(お茶の水女子大学)

娘が「選んだ」幼稚園

——娘の幼稚園を決めるにあたって——

倉田 知子

五月半ばの今、我が娘は、入園以来三日と空けず先生にバンドエイドを貼ってもらって帰ってきます。入園初日に登園途中転んで膝小僧をすりむき、先生に手当てをしていただいたことが、母親と離れて不安だった彼女の心の痛みをも和らげてくれたのでしょうか。それ以来、古い傷を探して

までも貼ってもらっているようです。先生も度重なる娘の要求に対して何の躊躇も無く、根気よく貼ってくださいます。そんな娘の気持ちを大切に、して下さる幼稚園を選べたことは、本当に幸いでした。

*

娘の幼稚園を決めるにあたっては、何か月かの間とことん悩み迷いました。とにかく良い保育者がいることを第一条件に、広い範囲でピックアップした六つの園に見学に行き、更に、気になった園はもう一度見学させていただきました。許してくださる園は、子どもと共に一時間程自由に見せていただいたりお話を伺ったりしました。

「実際に見て確かめる」ということは、大切な、貴重な体験でした。それは、「巷の評判や他人の評価は、あくまでも他人の評価である」ということとは言うまでもないことですが、各園の保育者の様子、子ども達の様子などを見ているうちに、一言で『自由保育』という名の下に行われている保育にも、その実様々な違いがある、ということが肌で感じられたように思うのです。そして、そん

な見学、諸先輩、友人からのアドバイスを重ねているうちに、私自身の「幼稚園に求めていたもの」が徐々に変化し始め、モヤモヤしていた状態からはっきりと輪郭を持ち、「娘にとってどういう環境が必要なのか」という事がわかってきたように思います。この過程は私自身にとっても貴重な財産となりました。

*

更に見学に行く中で見逃せなかったのが各園で



の娘の反応です。ある先輩から「案内子どもが自分で選んだりするものですよ」といわれましたが、その通り、まだ二歳だった娘は言葉で表現はしませんでしたが、その行動で自然と選んでいたのはとても興味深いことでした。まさに娘も私同様、違いを肌で感じていたのです。

ある園は園庭も広く施設も整い、きれいな遊具もたくさんありましたが、娘は終始ソワソワして落ち着かず、遊ぶきっかけもつかめず、途中で「もう帰ろう」といつてぐずってしまいました。娘にとってはたぶん環境が作られすぎていて自然に溶け込めないように感じたのでしよう。

反対にある園では帰ろうと促しても私の手を引っ張りながら、意を決したように自分の

靴を玄関から庭へ運び、黙々と砂遊びを始め、園児とは隔たりをおきつつもその側で長々と砂遊びをしていました。

この二つの園の娘の反応を見て思ったことは、子ども自身にとっては、幼稚園というものが「さあ、今日から今までの生活とはまったく違った生活になりますよ」という思いきってジャンプしなければならぬものではなく、自然な流れの中で自然な成り行きとして在る、ということは大切なのではないかということです。子どもにとって幼稚園は公園遊びの延長上にあり、でも公園にはお母さんがいて何か困った時にはお母さんにすがっていたものが、幼稚園では、そのお母さんの存在が自然に保育者に移り、ゆくゆくは困ったことが自分で解決できるようになる。そんな自然な流れで捉えた時、娘が自然にその中に溶け込み、しか

も黙々と遊べたその園の雰囲気は大事なものでないか、と感じました。

*

又ある園では、娘も園児の活発な遊びに促されて遊んでいましたが、どうも雰囲気娘にとつては刺激過多すぎるのか、自ら遊んでいるのではなく、「雰囲気（刺激）に遊ばされている」ようなそんな落着きのなさを感じていました。

娘の場合集団の場になると周りの人の事がとても気になり落ち着かず、結局遊びに集中できずに終わってしまうことがよくあります。そんな娘にとつてはなにか、遊びをせかされているような刺激の多さの中ではなく、やはりじっくりとでも自ら遊びを広げられる環境の方が大切なような気が

しました（これはもしかしたら「集団の質」というようなことなのでしょうか）。

そして母親である私も、一種、娘と同じような感覚を味わいました。

見学もはじめのうち子ども達の活発な活動にただ見とれていましたが、回を重ねているうちに私自身「元気さ」の「飽食状態」になり「えっ、ちょっと待って、これでいいの?」と思いはじめ、何か引っ掛かりができてきました。もちろん子どもというのは「元気」なものです。しかし園によつては何か「元気でいなければならぬ」そんな雰囲気があるような気がしてきました。

多くの母親の持っている子どもの好ましいイメージとして、明るく、元気な、活発なというものがあります。そして広く現代社会でも「明るい、活発」という事がプラス印象として感じられ

ます。でも、ともすると、もっと別の面、ナイーブな面があるのにそれを見てもらえず、明るいきりだけで良しと評価されてしまうことに逆に傷つく場合もあるのではないだろうか。

我が子を見ていると、動的に遊びまわりたい時と、今日はあまり動きたくない、静かにゆったりとしていたい、という静的な時とがあります。

又、友達を気持ちよく受け入れられる時と拒絶して一人でいたい時もあります。そういう、ありのままの自分でいいんだということが肌で伝わるような環境が娘にとって必要だと思ったのです。

「飽食状態」で何園かを巡った後、ある園を見学した時のことです。実習生（だった様に思います）が、二、三人の園児達と教室から少し離れたおままごとのおうちで、延々と一時間程遊んでいました。その遊びは決して活発ではなく、お人形と一緒にお布団にもぐったり座ったりと、「静



のものでした。その光景を見て、他の園にはなかった、何かホッとするものを感じました。「元気でいなくてはならない雰囲気」ではなく、子どもが気持ちを落ち着かせられる場所、がそこにはあったからです。

又その園に、今度は友人と連れ立って見学に行った時、その友人が「先生がどこにいるかわからない」と感想を漏らしました。私ははじめ、園の広さと保育者の人数の関係のためかと思いましたが、良く考えるとそうではないのです。そうい

えばその友人が見た教室では、先生が子どもにせがまれて何かを作っていらっしやったようで子どもの中がかがんでいらっしやり、文字どおり「どこに居るのかわからない」状態でした。他の園では先生が目立って生き生きしている姿を目にしましたが、先生が目立っていることって、たとえば先生が先頭に立って「楽しくさせている」姿であったり、みんなに呼びかけるような大きな声であったり……でも子どもの視線で一人一人の子どもに即しているとは自然と声も小さくなり目立たない存在になるのではないかと思うのです。いつか保育者である友人の勤める幼稚園を訪ねた時、彼女がその保育室と一体になって、ゆったりとした流れの中に溶け込んでいるような妙な心地良さを感じました。今度もそれと同じような気持ちになり、決して大人がひっぱっていない自然さを感じるとともに、それ故、何か子どもの内面からの力

を引き出してくださるようなそんな信頼感を覚えました。

*

こんな風に子どもと共に決めた幼稚園生活もスタートして一か月になろうとしています。警戒心が強く、どんな場に行っても馴染みにくかった娘が、驚くほどの速さで先生への信頼感を深めています。そして、実際の園生活は予想以上に娘を日々刻々と変化させています。山あり谷あり、その変化に、親の方が後からついていく、そんな新鮮さに戸惑いつつも浸りながら、親子ともどもこれからの成長を楽しみにしています。

(文京区在住)

子どものいる暮らしー男・夫・父

子どもが出来て

子どものありがたさを知る

西原 彰宏

結婚する前、家のなかで大きな木のようになりたいと思っていた。木陰では人が憩い、枝のあいだでは小鳥たちが安心して遊ぶ、そこにくとどんな生き物もほっとし、安心してよう大きな木のようにでありたいと思っていた。しか

し現実の私はそれからはるかに遠い。せめて、人が人と一緒に生きいきと暮らしていくうえで大切なことについて、私は子どもから教わる立場だということだけは心していようと思う。

保育を仕事とするようになって六年目に自分

の子どもが生まれた。はじめのうち家で子どもとつきあうことは、学校で子どもとつきあうことと変わりはないように思えた。それからさらに六年が過ぎた。その間、長男には四歳年下の弟ができた。二人の子どもが大きくなるにつれて、職業的保育者であることと父親であることにはちがいもまたあると思うようになった。

保育は日中数時間の仕事である。保育者は、事務の仕事が山積みになっていても、その数時間は子どもとしっかり向き合おうとする。大人の心がどこかよそにあっては子どもは満足しないからだ。ある意味では、このことは保育者にとって救いでもある。その時間どうあがいたところで事務などできない。「今は子ども、事務はあと」と割り切り、安んじて保育に没頭すればよい。

ところが家庭ではこれがうまくいかない。四

六時中顔をつきあわせていると、仕事用の大人の顔と子どもに應える顔を時間によって切り替えるということができなくなった。もともと子どもを育てるという営みは、大人の常識ではほとんど両立不可能と思われるふたつのことから、両立せよと子どもから要請されることが多し。そのことは、保育の経験からよく知っているつもりだった。しかし、家庭では自分の今の力の限界が露骨にあらわれる。私はいままで、「保育時間」という枠で守られていたのだと



知った。

自分の限界を

つきつけられる場としての家庭

子どもが生きて呼吸する空気を平和に保つのは大人の責任である。親の不機嫌はなにより家庭の空気を汚す。そう理屈ではわかっているも、実行しがたい時がある。

ある朝のこと、私は朝食もそこそこに台所の換気扇の下にいき、煙草を吸いながらまた仕事上の問題を考えていた。その一週間ほど前、私どもの学校が所属する組織全体のやむをえない事情で、学校の狭い庭を削って他の部門の建物を建てることになった。すでに設計まで終わっていた。私は、学校に相談なく決められたことに怒っていた。それ以上に、組織全体にとっては、赤字の学校は邪魔なのではないか

と私は疑い、学校の存立の危機を感じていた。さかんに長男が私に話しかけている。なんとか長男のほうに向き直ろうと

するのだが、頭はすぐ学校の問題に帰っていく。私はなま返事を続けていた。長男に話しかけられることが辛かった。突然妻が「お父さん、怒ってるでしょう」と言った。（家にいるときになぜ子どもに向き合えないのか）と妻は暗に言っていた。即座に私は「怒ってるよ」と言い放った。声は知らずに怒気をはらんだ（こんな時に、これ以上どうやって子どものほうに向き直れというのだ。この一週間、怒っていることを子どもにさとられないようにするだけだ。オレはせいっぱいだったのだ）。一瞬の後、



長男が声をあげて泣きはじめた。朝食を途中でやめて、大声で泣きつづける。私はやさしい声をつくり、「お父さんは君に怒ってるんじゃないよ。仕事のことが大変で、そのことで怒ってるんだ」と説明した。しかし長男は泣きやむ気配がない。それを見て、私は自分の考えの浅さに気づいた。

子どもは大人の感情を写し取る

長男は自分がしかられたと思って泣いているのでは、もともとない。私が仕事のことでは頭がいっぱいになっていることも私が怒り続けていることも知ったうえで、私に抗議して泣いている。私が怒り続けていることが苦しく悲しく、そのことを怒っている。私は、仕事上の苦しみを子どもたちに隠しおおせていると思っていたのだが、実際にはそれは感じとられていたの

だ。私はその一週間、自分の苦しき、悲しき、疑いと怒りでいっぱいになっていた。しかし、目の前で泣いている長男の涙も、私の気持ちと瓜ふたつの苦しき、悲しき、怒りを表しているではないか。私は、自分の苦しみを長男に負わせていると感じた。これ以上どうしようもない自分の人間としての器量の限界を感じながら、もう一度長男にあやまりなおした。長男は下を向いて泣きつづけていた。私は、自分の無力さをつきつけられる気がし、逃げるようにして家を出た。

子どもは大人を支えようとする

駅に向かって歩きながら、まだ、さっきのことを考えていた。この一週間、私は話しかけてくる長男をいつもよりしつこいと感じた。あれは、長男が単に私の不機嫌を耐えるだけでな

く、なんとか私の気分を変えようとし、私を支えようとしていたのではないか。

そう考えると、さきほどの長男は、父親にとってなんの支えにもならなかった自分の無力を泣いていたのではないかと思えてきた。支えようとする自分の気持ちがるで伝わらず、いつまでも怒っている父親に怒ったのではないか。(お父さんが怒っていることぐらいとつくの昔に知ってたよ。苦しいんだって、悲しいんだって知ってたよ。そんなことは一緒に暮らしていればすぐわかっちゃうよ。ぼくや弟と楽しく遊ぼうよ。そしたらお父さん元気になるかもしれないじゃないか。でもだめなんだね。ぼくにはお父さんを助けるなんの力もないってことなんだね。お父さん、お父さんにとってぼくはいったいなんなのさ。ぼくはいないほうがいいの?) あれば、そういう泣き方だったのだ。そ

こまで考えて、長男の気持ちがやっと納得できた気がした。

支えることと支えられること・愛することと愛されることは、一緒に生きる人にとってはひとつながりのこと

子どもと一緒に暮らしていると、私の感情が子どもに移ってしまったと感じることがしばしばある。はじめのうちは不可解に思えたが、いまは当たり前のことと思うようになった。子ども



もは私の想像を越えて私の心に共振する。そうして、私が苦しんでいるときは、私を支えようとし、苦しむ。子どもにとっては、「支えること」と「支えられること」は正反対のことからではない。「愛すること」と「愛されること」まで含めて、それらはひとつながりのことなのだ。子どもは愛されようとすることで私を支えようとする。その気持ちに応えるとき、私は支えられる。言葉で言うとは厄介になるのは、我々が人間をひとりひとり孤立した生命として考える見方に慣れているせいであろう。事實は平明なのだが。

一月ほど前、田舎に独りで暮らす老母が癌にかかっていることがわかった。別れが近いことを意識しながら、週末に飛行機で田舎の病院と都会のあいだを行き来する生活がはじまった。自分の中でもすでに老いがはじまっていること

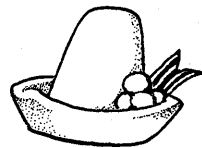
も感じるようになった。心弱り、体は疲れ果てて家に帰りつくとき、子どもはなんの疑いもなく、心をひろげてウルトラマンごっこに私をさそい、本を読んでとせがむ。あとになんにも残らない子どもの動き、小さなしぐさ、喜びの表情それ自身が、命の一滴一滴だと痛切に感じられる。子どもに自分の生命がはげまされるのを感じている。

(愛育養護学校)

「児童の世紀」を振り返る

— その三 —

本田 和子



児童研究の根拠

幕開けした二〇世紀が、「児童の世紀」であり得たか否かは別として、「児童研究の世紀」であったことだけは疑うべくもない。先に言及したフロイトによる「幼児体験の発見」に加えて、新しく児童心理学に科

学的方法が導入されたことで、幼い子どもが客観学の対象たり得ることが発見されたのであった。結果として、子どもについて語ることは、幼年期を遙かな過去として懐かしく回想したり、あるいは、親となった喜びに駆られてわが子の成長を記述するという私的領域から脱して、曲がりなりにも客観性に依拠した学問的

言説で装われるようになる。

わが国もまた、その動きを共有しつつ今世紀の歩みを開始した。一八九八（明治三一）年、雑誌『児童研究』の発刊はそれを象徴する。第一巻第一号の冒頭に掲げられた「発刊の辞」は、その基本精神を次の言葉で明確化していた。

一九世紀の後半に於て世界の事物は著く進歩し學術に工藝に皆駸々として觀を改めたり而して學術に於て其進歩の顯著なるもの醫學の如き理化學の如き固より一にして足らずと雖も心理學の如きは又其顯著なる進歩の行程中にあるものといふべし

（中略）

就中兒童心理學の如きは其發達最も速にして獨に佛に英に米に或は醫學上より或は生物學上より或は生理學上より或は解剖學上より熱心に之を研究し終に單に心理學の名に満足せずして兒童學の新

名稱を附與し兒童の心身全體に關する研究を創むるに至れり蓋し一對象物に就き斯の如く各科の學者が熱心に研究したるものは古來其類多からざるべし抑是等の學者は何の必要ありてかゝる熱心を兒童の研究に傾注するか即各自が専門とするところの學に新光明を與ふべき秘密は藏れて可憐なる此新來の賓客の中に在ればなり而して特に教育の如きは直接に兒童に關係せるものなれば其研究の必要一層切を加ふるものあり是歐米の學者及我國の識者が夙に其研究を企圖したる所以なりとす

（以下略）

ここで使用されている「児童學」という新名稱が、どの程度、子どもに関する総合学としての自覚に支えられていたのかは定かではない。また、海の彼方に勃興しつつあった「子どもを子どもとして総合的に把握しよう」とする動き、たとえば WHOL CHILD と

う概念の強調や、あるいは「バイドロジー」という領域を確立しようとする運動と、どの程度コミットしているのかも不明である。当時の啓蒙的女性誌『女学雑誌』などには、おりに触れて、子ども研究の新動向が紹介されていたから、恐らくそれらと無縁とは言い難いが、ただし、それらに影響されたとする根拠もない。

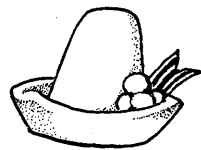
しかし、児童研究の進歩を企図したこの雑誌の創刊は、大洋を隔てた両地域で、子ども研究に注がれる類のまなざしが発生したことを物語るものとして興味深い。前文で語られているように、医学・生物学・生理学、そして心理学等の諸分野に、研究対象として、より正確には「研究材料」として、「子ども」が大きく浮かび上がってきたことは疑うべくもないのである。

子ども研究の興隆に関して、恐らくは編集主幹の高島平三郎であろうが、「発刊の辞」の筆者は、次のよ

うに説明していた。すなわち、児童という可憐な対象のなかに、それぞれの学問分野に「新光明を与ふべき秘密」が内蔵されているからと言うのである。ところで、この一文があらわにするのは、次のような学問分野の新事情に他なる

まい。つまり、人間を対象とした既成諸学のなかの少なからぬ分野が、分野の拡充と充実を期待して「子ども」という新素材の上に熱いまなざしを注ぎ始めたということであろう。しかも、その期待は、進化論に触発されて、始原の解明による事象の明確化を志向するものであった。

同誌上の論説欄には、それを裏付ける「児童研究の必要」と題された一文が掲載されている。この一文において、筆者は、おおよそ事物の研究は詩的段階から始まって科学的研究に移行するとし、児童研究も例外



ではないと位置づけてルソーの『エミール』を例にとる。すなわち、ルソーの提言は世人の児童観を革新するほどの力あるものには相違なかつたが、ただし、彼は心理学者でも生理学者でもなく、そのゆえに詩的眼孔で子どもを見たのであって、現今の学者たちのように科学的眼孔で子どもを観察してはいない。しかし、今世紀（一九世紀）後半の科学の進歩は、従来は詩的観察の域に止まっていたものをも科学的観察の対象へと移し替えてしまった。そして、児童研究もまた、その一連として、新しい科学のまなざしに晒されることになったのである。しかも、児童の科学的研究は、「児童研究」ならではの独自の意義と必要性に彩られている。

而して児童研究の如きは如何なる種類の必要によりて起りたるものなるか。今これらの問題に就て考察するは、頗る有益なることなりとす。吾人

は便宜の爲めに、茲にその理論的方面に關する必要と、實際的方面に關する必要とに分ちて、之を論せんと欲す。

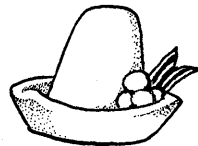
今理論の方面よりして之を云へば、児童研究の必要は、児童が原始的のものになるあり。自然科學にありては、動物學及び植物學の如きは、古生物學の研究によりて大にその眞趣を解釋し得たるもの少なからざると同じく、既に發達せる人間の心理を研究せんとするものは、原始的の狀態に溯りて、児童の心理を明らかにせば、之が爲めに、大いに得る所あること勿論なり、又人類學者にとりては、児童は自然の位置に於て成人と動物との中間に位するものなるを以て、人類と他の動物との比較的研究をなし、或は文明時代の児童と野蠻人とは、如何なる點に於て類似せるかを發見するを得べし。

(以下 略)

動物や植物に関する生物学的見解は、進化論的知見によって大幅な革新を遂げ、その原初形態と進化過程の解明は、それらの生態をよりよく理解させるものとして機能している。それに倣うならば、人の始原形態たる子どもを観察・研究することにより、人間に対するより本質的な理解が可能となるに相違ない。人間を対象とする科学的研究は、ダーウィンらの指先が指し示した方向に学んで、人の始原を「児童」に求め、その解明への取り組みを意図したことになる。

しかも、ことは、科学的人間理解の域に止まらなかった。先の文章は、哲学、倫理学などの人文諸学を例に取りつつ、児童研究はそれらの分野をも深化させると断じる。たとえば、子どもの研究は、人間の生得的な能力と経験に基づくものとの区別を可能にするし、先天観念の有無に関してもある種の根拠を提供することが出来る。もし、児童が人生の最初に心に起こるものを語ってくれるならば、カントの唯心論さえも

が理解可能になる筈であり、また、人間とは、本来的に良心的存在なのか否か、或いは、自愛的な存在か他愛的存在かを決定するのでも、児童研究の成果に負うところが大であろう。と、こういう次第で、児童研究は諸学の発展と深化のために不可欠となったと云うのである。



その後、続く実践的必要性では、幼児・児童の教育における対象研究の重要性が説かれているのだが、この文章が物語るのは、日々隆盛の度を加える教育事業に関して、科学的根拠を求める意志であろう。何が「最も必要なもの」であり、どのような営みが「確実な指導」と言い得るかを判断するのが「児童研究」であるとの強調は、その端的な証しと言い得よう。

進化論によって新しく意義付けられた「子ども」は、進化論的始原探求のまなざしに囲繞されて諸分野

における学問研究の対象と化し、その「教育」は、科学中心主義の申し子として根拠に科学的必然性を求めた。エレン・ケイが待望した科学の時代は、紛れもなく訪れた。しかも、科学はすべてを説明し得るとする素朴な楽天性に支えられて、今世紀の子どもらを覆ったのである。

パラドックスとしての「童心主義」

——遅れてきた湖畔詩人たち——

稚兒を見よ。其目の清しきはみ空の星の如く、
其頬のふくよかに麗はしきは、なべての花にも木の
實にも劣らず。物見るに怖れといふものを知ら
ず、泣くにも笑むにもわが心のまゝにて、欲しと
思ふ物あれば手をさしのぶるに誰憚ることなし。
神の如き無邪氣とは之なるべし。とりわけて心ひ
かるゝは、母の乳房にすがれる時也。眞白き胸に
顔をおしつけて、ひたすらに勢ひよく吸ふさま

は、さながら一切の生命の吸ひ盡くさむとするものゝ如し。赤子とはよくも謂ひけるものかな。かく許り赤裸々に、かく許り公明に、かく許り清くして又かく許り弛みなきいのちに充ち満ちたるもの、げにまたと此世にあるべきやうもなし。昔賢女コルネリオ、一婦人のために其所持の寶玉を見んことを望まるるや、己が愛兒を指して、彼等こそ妾が第一の寶玉なれと答へき。まことに然り。たゞ可愛しといふのみにては、恐らくは其意足らじ、神の如く無邪氣なる小兒ほど、何者にもまして貴きものはなからむ。

(以下略)

ここに謳われた子ども賛美の過剰さと、その臆面もないまでの陶醉ぶりは、現在の私どもの現実感覚の前に、いささかならぬ戸惑いと若干の気恥ずかしさとして受け止められるのではないか。日常をとにもする仲間

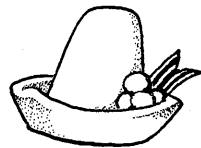
として見るとき、子どもとは、常に怖れを知らぬ存在でもなければ、また、必ずしも神の如く無邪気とばかりは言い難い存在であると知っているからである。しかし、この時代の空気は、こうした誉め歌に寛容であつた。というより、ともに声を揃えて誉め歌を歌おうと意図した節さえ感じられる。なぜなら、こうした子ども賛歌は、一人啄木の筆だけではなく、他の多くのもの書く人々の筆からあふれ出しているからである。

例えば、一九〇四（明治三七）年には教育ジャーナリストの下中弥三郎が、啄木に先立って、彼にも勝る子ども賛歌を『婦女新聞』紙上に奏でていたのだつた。

子供、子供、子供、世の中に子供ほど美なるものはなく、子供ほど真なるものはなく、而して又子供ほど善なるものはありません。婦人が人間界の

花でありますならば、子供は人間界の實であります。否、子供はこの地上に於ける神であります。子供は大人の如く偽をつきません。子供は大人の如く恐れを持ちません。子供は勇ましく活發であります。子供は實に強いものであります。

（以下 略）



今世紀の初頭、わが国の一部知識人たちの目には、「子ども」こそが人間の当為であり、あらゆる価値の実現体として映じたということらしい。私も、ここに、子どもの「無垢」に人間の理想を見た、一八世紀後期イングランドの湖畔詩人たちの残響を聞くことが出来る。そう言えば、先の啄木の文中には、「小児は成人の父である」と言うワーズワースの言葉が引か

れてその先見性が讃えられると同時に、一方では、子どもを父と仰ぐことを忘れ、ひたすらに成人化を急がせる現代が嘆じられ憂えられていた。彼らは、一世紀遅れでやってきた「わが国の湖畔詩人たち」とでもいうのだろうか。

先に触れた『児童研究』誌は、六年後には編集責任を従来の「教育研究所」から「日本児童研究会」へと移して、研究誌とします。充実を期する旨が宣言されている。会長には帝国大学教授で科学的心理学の導入者として知られる元良勇次郎が就任し、会則も制定されて、研究会としての組織が整えられていた。今世紀の一つの特色たる「教育に奉仕する科学的児童研究」が、いまだ拙く頼りない足取りとは言え、ともかくにもその歩みを開始し、順調に歩幅を広げつつあったのである。

そんななかで、わが国の湖畔詩人たちは「子どもは大人の父であり、大人になる必要などはないのだ」と

ばかりに、臆面もない子ども賛美を繰り返す。教育の根柢として子ども研究が推進される時、仮に動機が「子ども尊重」という社会的善意であったにせよ、その実、効率的な成人化という意味の「子ども殺し」が遂行されることに、当代の詩人たちは敏感であったとでも言うのだろうか。このことは、稿を改めて考えるに値する興味深い問題と言えよう。

(聖学院大学)

韓国 の 伝統 芸能 の 今

小林 美実

韓国の人々と親しくなってから、十七年たちました。
た。

私が初めて韓国を訪れたのは、一九八〇年（昭和十五年）のことでした。当時は入国にビザが必要な上、ソウルの子ども病院などでのボランティア活動（人形劇公演など）が目的の渡韓だったため、書類や説明などに時間がかかり、ビザの取得に苦労しまし

た。もっともその頃は、アジアのどこへ行くにも、予防注射、ビザの取得などまだまだ大変な時代だったのです。

数年にわたり何度か韓国を訪れるうち、私たちの知らない韓国を知ることになりました。知らないというより、知ろうとしなかった、というべきでしょう。東京からわずか二時間、九州の博多からなら目と鼻の先

にあるこの国の現実を知って、私たちの生活とのあまりの違いに愕然としたことを覚えています。

二度目のソウル滞在中、年に一回行われる本格的な防空訓練を体験しました。夜、完全な暗闇と化した韓国全土の空に突如交叉するサーチライトの光に、私は自分の女学校時代を思いだし、この国が未だ戦争を終わっていない休戦状態にあること、そしてこの首都ソウルの北、車でわずか一時間余の所にその休戦ラインがひかれ、そこでは常に国連軍と北朝鮮の軍隊が対峙していることを思いしらされたのでした。このような訓練が必要であること、そして男子は兵役の義務があり、大学生たちも在学中一定の期間軍隊にはいらなくてはならないこと、そのため大学では軍事教練が行われていることなどが、休戦という緊張状態の中で人々に納得されていることを知り、複雑な気持ちになりました。ほんの隣の国、日本では、当時、そして今も何パーセントの人がそのことを知っているでしょうか。

私の韓国の友人は、韓国を歴史上「喜び、悲しみの事件が一番多い国」といいます。大陸からつき出た半島の地には、大陸から、そして半島の先にある日本から、何度も侵略されてきたという歴史があります。このことは、この国のことを理解するのに重要なことなのです。

私たちを受け入れ公演活動を全面的に支援して下さる方で、著名な随筆家の李京姫女史に、或る時、朴李順さんを紹介されました。この人は無形文化財である伝統芸能「男寺党（なむさだん）」の座長であり、技能保持者、人間文化財として活躍している人でした。大変素朴な、しかし男性ばかりの集団をひきいる迫力を感じさせる女性でした。もともと「男寺党」は、「農楽」（打楽器を演奏しながらのアクロバットな動きと頭上の長いヒモの動きや、めまぐるしく変わる集団のフォーメーションの面白さをみせる）「人形劇」「曲芸」などを演じて村々をまわる放浪芸の集団でした。

彼女の家で一晩一座の人々もまじえて酒を飲み語りあつた時のことです。

次第に気分が高まって来ると、彼女は目を細め、体をゆったり動かしながら朗々と歌いだしました。それにあわせるように、皿まわしの金さんがたちあがり、両手をひろげ、かかとで床を軽く打っては体をうかせような身振りで踊りだしたのです。やがて朴さんも他の人々も歌いながら踊りに加わりました。それは踊るというより、大きくゆったりと舞う動きでした。李女史が言いました。「彼女は、あなたを歓迎する喜びを歌っているのです。ことばもメロディーも即興です。湧き上がってくる嬉しさが、止まることなく歌わせるのです。もう通訳する必要はないでしょう。あなたは私たちの嬉しさを感じられるはずですから」といって立ち上がり踊りはじめました。じっとしてられない気分でした。私も踊りの仲間になりました。時々むぎあつて踊る相手と互いに目をみあわせ、動き

をあわせる。次第に歌も動きも激しくなる。この即興の舞は数時間続きました。帰りに朴さんは、突然一言の日本語で「姉さん」と私に言うのと、私の肩をだいて涙を流したのです。彼女は私より一歳若い。日本統治時代の貧しい辛い生活。やがてそれに続く朝鮮動乱の時代に、彼女は食べるためだけで放浪芸人の群れに入つたといいました。後に座長と結婚。そして座長の没後、この一座をひきい、無形文化財として国が認めるまでにしたその苦労が一度に噴き出るように思ひだされたのでしよう。日本人である私に対する気持ちには複雑なものがあつたと察しられました。「私は、日本人であるあなたと今夜気持ちがひとつになれた。それが嬉しい」。幾多の苦悩をのり越えた強さ、心に秘めた激しい感情が、彼女の声に歌にありました。

この一座の本当の舞台は、劇場ではなく、野外なのです。お客も土の上に座っている。マイクも無い野外でリーダーとしてしゃべり歌い、農業ではドラを打つ



▲農樂パフォーマンス

て男たちに伍して歩く。韓国の伝統的な歌舞には、心と体のすべてを声に、動きにし、思いのすべてをはき出してしまふような強さ、すごさがあります。日本でも有名なチョウ・ヨンピルの歌にも、韓国の伝統的な語りのような歌謡「ばんそり」にも、韓国で生きる人のもつ強さ、ほとぼしる激しさが同じように感じられます。韓国の土俗的な民衆の力が、感じられるのです。一方韓国には大変優雅な民族舞踊や楽器演奏があります。観光旅行でも観賞ができますが、一見優雅にみえて、実は激しいものがその奥に感じとれ、ただ「きれい」ではすませられないように思います。

当時韓国でこの一座の芸能は、あまり評価されていませんでした。放浪の芸人たちということで、私にひどいことばで評した知識人もいました。しかし李女史は、「今にこれが韓国の代表的な芸能と皆が認めるようになります」と自信をもっていました。

さて、今、どのようになったのでしょうか。一座の芸

のうち、韓国の人々の心をことばでなく音とリズムと動きで最も激しくゆさぶると思われる農楽、これが若者たちに盛んに演じられています。おそらく韓国の全大学にこのグループがあるとされます。大学のグラウンドで軍事教練をしているもう片隅で、このにぎやかな農楽の練習をしているといった場面にも出会いました。日本でも、在日韓国の人々が、お祭りやパレードでにぎやかに堂々と演じ、皆の心を興奮させています。「男寺党」から世界的に活躍する有名なパーカッション・グループ（打楽器集団）「サムルノリ」のメンバーができました。芸術的な演奏グループになった今も、彼らの音楽からは韓国の土俗的な匂い、強い激しい情念が決して消えていません。

十数年前、ソウルのある大学で、教育音楽の教授に、韓国の子どもの伝承あそびやわらべうたについて尋ねたことがあります。返事は「そんなものはありません」というそっけないものでした。しかしこれを責

めることはできません。日本でも同じでしたし、私自身教師になったはじめの頃は、子どもを含む一般大衆の、生活の中で伝承される遊びや芸能に対し、全く興味を持っていなかったのですから。

昨年十二月、学生たちと韓国に行き、ソウルの幼稚園を訪れて驚きました。子どもたちが手に、うちわ太鼓のような韓国の打楽器（テウゴ）をもっているのです。先生のまわりに集まって、先生の打つまねをしてたたきだしました。そのリズムは、三拍子の韓国独特のリズム、朴さんと踊りつづけた時のリズム、有名な民謡「アリラン」にもふさわしいリズムなのです。先生も子どもたちも、口三味線風に歌いながら体を軽く浮かせるようにゆらして、本当に嬉しそうになりました。われわれ日本人には無いリズム、ゆれです。それを幼い子どもたちもしっかり受け継いでいるのです。あたりまえのようで、教育の場では忘れていることです。



▲ 소고(小鼓)を打って楽しむソウルの幼稚園の子どもたちと日本の学生たち

韓国は変わりました。人々の生活は日本と変わらぬい豊かさになりました。しかし子どもたちの家庭での教育（しつけ）はまだしっかり行われているようです。日本より激しい大学入学の受験競争にもまれながら、しかし若者は本当に活気があり、すべてに前向きです。二年前から始まった「韓国大学人形劇フェスティバル」に全国三十余の大学から集まった男女の学生たちは、まだ人形劇は未熟でしたが、レベルアップする日が早いことをその熱気から十分感じとれました。韓国は今も休戦状態です。依然として、ソウルのすぐ北には、休戦ライン、そして板門店があります。そのことを抜きにして、この国の教育も生活も文化も語れないということを知って欲しいと思います。

（宝仙学園短期大学）



子どもの世界の表と裏

津守 真

保育者とかかわりの中に生まれる遊びに子どもの世界はあらわれる。逆に、遊びが妨げられたとき、そこから立ち上がる場所にも子どもの個性的な表現がある。

手を引く——思いを伝える

ひとりの子どもが登園すると、私の手を引いてピアノに連れて行った。その子の中には前日の記憶があつて私の手を引いたことは明らかだった。子どもが大人の手を引くときは、(1)自分の眼前の目的を果たすために大人の助けを求めるとき、(2)大人に親しみを寄せるとき、(3)自分の世界を実現するのに大人の助けを必要とするときなどが



ある。この場合は三番目である。前日、いつもプロペラを手から放さなかったその子は、ピアノのリズムと一緒に汗をかいて走り回り、心が解放された。そしていつのまにかプロペラを手から放していた。力いっぱい走ることによって、人は現実から解放されて、広い世界に目を向けることができる。この子は自分の世界を実現するのに大人の助けを必要としていた。

走り回る——解放される

この日、その子は私にピアノをひかせてホールをぐるぐると走り回り、それにつられて何人もの子どもたちが一緒に走り回って、朝のホールはひととき賑やかな活気にあふれた。

顔を伏せる

ひとしきり走った後、別の子どもが来て、その子の髪を引っ張った。髪を引っ張るのにもいろいろの場合があるが、このときは他人への関心がこのような行動にあらわれたのだと思う。引っ張られた子どもにとってはショックだった。その子は一度手放したプロペラを再び握って顔を伏せ、低い声でうなずいて動かなくなった。そのままにしておいたら、ひとたび開かれたこの子の世界が再び閉ざされるだろう。傍らにいたF先生が電気掃除機をもってきた。

電気掃除機——エネルギーの供給

電気掃除機は大きな音をたてた。その子は驚いてみつめ、それにまたがって機嫌がなおった。おもいがけないときにふりかかった災難を、子どもは電気掃除機からエネルギーを供給されて、乗り越えることができた。乗り越えるのにそのエネルギーを外から供給されねばならないときがある。子どもにとっては、電気掃除機は宗教的とも言える程に身边を超越した力なのだろう。しかもそのエネルギーを発する機械にまたがってこの子はそれを自分のものとした。

人形の手

それから、その子はとれた人形の手を二本もってきて、体のわきにおいた。彼が何故こわれた人形の手をもってきたのか、私は不思議に思ったが、じきにその意味を悟った。手を使ったことがなかったその子が、はじめて自分の手で弁当を食べ、自分の手で紙を切り、手を開いたのは数週間前のことだった（拙著『保育者の地平』第一章4-4 手を使うこと参照）。自分の手についてその子の強烈な体験が、人形の手に着目させたのだろう。とれた人形の手だけを見つめていても解答はでないのだが、継続する保育の

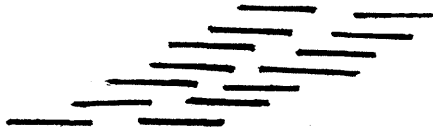


図1

中の知識がその答えを与えてくれる。

積み木を積む——自分の世界の実現

それからその子は小さな長方形の積み木を、階段のようにずらして七段程重ねて積んだ。崩れても怒らないで自分で積み直した(図1)。また、二本の柱の上に長方形の積み木をのせて、更にその上に二本の柱をたてて長方形の小積み木をのせ、それを三段重ねにした。その子は心を集中させてそれをした(図2)。注意深く進めるその作業の間、その子をひとりにおいておいた方がいと思う、私は遠くから見ている。三段積み重ねるとその子は私の手を引きに来た。私がもう一段積んで、次の積み木を渡すと、自分で更に積み、六段まで積み上げた。

子どものイメージにしたがって積み木を積むことにこの子の世界が表現されていると考えていい。

高く積み上げようとするのは、バベルの塔のように、人間の心の深くにある望みであろう。それは成長とともに文化の土壌で培われなければ自分勝手な野心にもなるのだが、いまはそれよりも執われていた心から解放されて、自分が高く積み上げる世界を体験することに目を向ける時である。

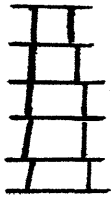


図2

無限に高く積み上げようとする野望は、人生のどこかで神の手によって崩される。

自分の頭を私に叩きつける——他人から受動的にされたことの再現

そこに別の子が来て、高く積んだ積み木を倒した。その子にとっては思いがけないときにふりかかった災難である。ひっくり返ったときに頭が床に当たった。その子は積み木を放り投げ、低い声でうなった。私は急いで近寄り、その子をかばった。

その子は泣いて私の頭に自分の頭を叩きつけた。長い間そうやって声をあげて泣いた。ときどき頭を床にも叩きつけた。これは自分が他人からされた通りの状況の再現である。

「こうやって僕はやられたんだよ」と、感情をこめて表現したのである。私はその子の気持ちを慰めるようなつもりで傍らにすわっていた。そこに私が気が付かないうちに、積み木を倒した子が来て、更にその子の髪を引っ張った。

うらやみ

私がかがみこんでその子をかばったとき、別の子は一層はげしく髪を引っ張ろうとし、あたりの物を私に向かって投げた。その子をかばった私の行為に対する裏側と考えていいだろう。丁度そこに来たF先生が間にはいってくれたので、私は髪を引っ張った子と向かい合うことができた。



F先生がもってきた掃除機が、涙をふいた紙を吸い取るとその子の機嫌が直って来た。おしっこに行きたくなり、おしっこをして、気持ちがもとに戻った。おしっこと共に感情も流れ去ったように思われた。



この一日の中で、この子が一番自分の世界を表現しているのは、積み木を高く積んだところであろう、手を使って積み木を高く積むこと、それも高くするだけでなく、自分のイメージをもって複雑な積み方をしている。その前段階として、手を引いて大人に頼むこと、ピアノに合わせて走り回ることなどがあつた。そして積み木の遊びにこの子の個性的表現はあらわれた。この子はこの日満足したに違いない。

ひとりの子どもが保育者に助けられて自己表現をすると、それがうらやましくて積み木を壊したり髪を引っ張ったりする子どもがあらわれる。更にそれに反応して別のできごとが起こる。こうしてひとりの子どもが何かをすれば、社会的状況が変化し、その裏側の出来事が起こり、更にそれは別の反応を呼び起こす。髪を引っ張ること、顔を伏せること、電気掃除機、頭を叩きつけることなどはそれである。そこにもまたその子の個性的表現があらわれる。

子ども時代と私(8)

私の中学生時代

—— 戦時中の三年間(2) ——

湯沢 雍彦



工場の中で

さて、前述したようなストイックな猛訓練は日常的なことだったので慣れっこになっており、精神的にはあまりこたえなかったが、本好きの私には、好きな読物や参考書が店頭からどんどん消えていくの

がたまらなかった。今からみれば信じられないことだが、学校には図書室もなく、日曜ごとに神田古本街へ行ってみても、児童書も文学書も学習参考書も全く見当らなくなっていた。僅かに、徳富蘇峰の『近世日本国民史』全巻と戦争本だけが新刊の棚に並んでいた。時局に合うものだけが刊行されていた



のである。もっとも、遠いイトコが佐々木邦の『トム君サム君』や吉野源三郎の『君たちはどう生きるか』を持っていたので、借りて読むということはできた。しかしそれらは平和の時代の金持ちの暮らしが描かれており、遠い国の昔話のようで身につかなかった。そのうち、教科書さえも無くなってくるのだが、二年生（昭和十九年）の十二月からは軍需工場へ動員されたので（私達の学年が動員の最下限のようだったが）、その必要性もなくなったわけである。

十三、四歳の少年が工員として使われるのか。職種にもよるが、私の判断ではかなり役立ったのではないかと思う。新聞やラジオは小学生までも「少国民」とはやし立てていた。二年生は明電舎目黒工場、三井鉱山目黒工場、本多電気五反田工場へと分けられた

が、私のクラスは本多電気であった。アルカリ蓄電池を作り、それを炭鉱で使う大型電池ボックスへ封入する工場であった。いくつもの部所に分れたが、私は他の二名とともに製品検査室へ配属された。製品からサンプルを抜き出し、規定の濃度に適合しているかどうかを定量分析するのである。これは、材料の運搬やかくはんなどの作業に比べれば軽作業だがやや高級な仕事で、化学の知識を必要とした。しかし化学のことは学校で学び始めたばかりで、分子表すらもよく知らなかった。そこで工場技師のKさんやMさんは、化学のイロハからピペットの持ち方、精密天秤の計量法まで教えてくれた。まるで教室のようだとは他部所の友達からは羨しがられ、肉体の疲れは感じなかった。工場二階隅に一台だけ卓球台があり、私は余ったエネルギーをここに注いだので卓球だけは上達した。野球やバレーはやるうにもボールがなくテニスコートは全部野菜畑に変えられていたから、唯一のうさばらしがこれに

なった。

歌心を求めて

昼休みには、碁や将棋を工員と争う友が少なからずいたが、ラジオから流れ出る「月月火水木金金」や「出てこいニミッツ・マッカーサー」といった軍歌まがいの歌を合唱する者はほとんどいなかった。しかし「ラバウル小唄」や「同期の桜」を口ずさむ声は聞こえていた。

また、どういう動機からかは分らないが、その頃の日記にある新聞社が募集した「産業戦友愛の歌」の一等に当選したものの切り抜きが貼ってある。その二番はこうだった。

汗の作業衣は ほまれの晴衣

これでゆこうぜ 勝つまでは

きつと最後は こっちのものよ

明るく元気で ナア兄弟

明るく仲よく やり抜こうぜ

しかしこの歌は、私を知る限りちっともはやらなかった。

我々は決して沈んでもいなかったし、暗くもなかった。しかし、状況の悪化から、我々の意気込みはカラ元気のような感じを否めなかったのだ。泣くこともなかったが、本当に笑える日もなかったのである。夜は昔の詩と共に時に新聞を飾る詩を読んで気をしずめるようにした。その頃私の日記に書き写したもので、今でも忘れ難いのは「前線にて一勇士の詠へる〈笑〉」という題の詩であった。

笑ひ忘れて幾月ぞ

胸を拡げて心より

笑ひあひしは何日の日ぞ。

遠き昔の晴れし日の

青き夢にはあらざるか。

弾丸と爆撃たえまなき

いくさの庭に起き伏して

すでに心の荒びしか。

雨とちこむるジャングルに

わづかに凌ぐ露しづく。

飯のすまひに疲れはて

飢えてはてしかわが心、

あゝ、笑はざる幾月ぞ。

いざ耐へ待たん、今暫し

やがて勝鬨あぐる日に、

友と笑はん、高らかに、

腹裂けんまで、

口割れんまで。(吉田嘉七)

木村先生の教え

もちろん、その間にも先生方は手分けして工場内の生徒を見にこられ、いろいろな深い印象を我々に与えて下さった。

中でも忘れ難いのは、木村武夫先生のことである。木村先生は、私のクラス担任になったことは無

かったが、学年主任として一年から五年までずっと持ち上がりだったので、四十歳前後の働き盛りのエネルギーのすべてを、生意気盛りの少年たちに傾注されたのであった。

一年に入学した時二九〇名であった我々は、戦争のために、中退・転校・編入・再転入などの移動が激しかった。しかし木村先生は、のべ四〇〇名近くにも及んだこの学年のすべての者の顔と名前と出身校を覚えていたので、どんなはずれ生徒も、先生の眼光からのがれることはできなかった。

英語の担当であったが、不意試験であれ、期末試験であれ、その採点は実に厳しく、文法の違いはもちろん、一スペルか一日本語が違っていても、五点ずつ差し引かれるので、八十点以上を維持するのは容易なことではなかった。

しかし、まともな授業が受けられたのは、二学年の十一月までだった。動員で勉強をしなくてすむようになった我々は、内心ホクホクして一人前のおと

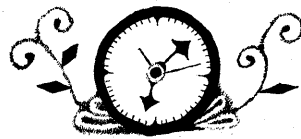
なのように、工場の中で毎日を送るようになった。教壇に立てなくなった先生は、生徒が分散した工場をこまめに回って歩かれては、「勉強を忘れるな、きつと物を言う日が来るから」と繰り返された。数学や理科はともかく、「敵性語」と指定された英語の担当者として、切歯扼腕される気持ちが表示されたお顔には、いつも悲痛なかけがあった。

昭和二十年八月十五日、終戦の日を私は、次の動員先「中島飛行機・三鷹工場」（現在の富士重工）で迎えた。ジリジリと真夏の太陽が照りつける正午、エンジンの穴をあける作業を中止して中庭に集められた我々勤労学生は、聞きとれぬ玉音放送が終わったあと先生の目から熱い涙がこぼれ落ちるのを黙って見ていた。先生は細かい状況については何も説明されず、ただひとこと「戦争は終わった。また勉強を始めよう。それが私達の仕事だから」とだけ言われた。

東京新宿の焼け野原の只中に立つ校舎は、幸いに

焼け残ってはいたものの、ノートも教科書もカバンも失った我々は、何をどう勉強し始めれば良いのか、見当もつかなかった。しかし第二学期は、早くも八月二十七日から始まっていた。

先生は、当時貴重品のひとつであった謄写版原紙をどこからか入手し、それに英語リーダーと文法のテキストをていねいに書き写され、粗末なわら半紙に刷っては、授業のたびに我々に配られた。それが三か月経ち、半年経ってそろえると、教科書そっくりのように製本できるのが驚きであった。コピー機械はもろろなく、黒板に書いてノートに写させるだけの授業が大半であった当時において、これは大変な努力の成果であることが生徒にも良くわかった。我々もそれに応えなくて





はならないという気に、自然にさせられるのであった。予習や復習を怠って我々が返答に窮すると、先生は目を大きくしてにらみ据えた。指示棒でたいたり、チョークを投げつけたりする先生よりも、この目の方が我々にはこたえた。

「今日のことを明日に延ばすな」「その時その事に全力を尽くせ」。静かな口調でそう繰り返された先生の言葉は、今でも耳に焼きついている。我々の学年から、同時通訳の開拓者、国弘正雄や、文化学者の加藤秀俊のような英語の達人が出たのも、先生の英語教育法と無縁ではないだろう。

私自身、教師のはしくれになって三十年近くになるが、木村先生のような情熱と人格が伴う教育者には、いくつになっても及びそうもない。今振り返ってみても、生育環境としてはこの上なくひどい

中学生活だった。だが、それを理由に挫折してしまっただけで一人も出なかった。弱気を許さなかったきびしい状況は、よき師・よき友に恵まれる限り、思春期の少年にとっては、あるいは最上の教育条件になったともいえるのである。

(郡山女子大学)

なお「木村先生の教え」の一部は、「熱情と人格が伴う教育者」(未来社編『十代にどんな教師に出合ったか』一九八五年)から転用しました。

夢の田々(一)

二人で入園し、 三人で卒園

大多和 檀



私は、平成五年四月から平成七年三月まで、港区立神明幼稚園で、「エッ！二人？」と、たくさんの人たちから——特に幼稚園の先生にこの反応は多かったです——びっくりされた担任時代を体験しました。二人が三人となって——年長の九月に一人迎えました——卒園した三月に公立幼稚園を退職し、四月から、木々にかこまれた、冬は丹沢おろしの寒い風が通り抜け、その代わり、夕方には夕陽と富士山のシルエットがとても美しく見える、園児三百五十名の私立幼稚園に転職しました。

そして、この年、園児のお母様から『七歳までは夢の中』という松井るり子さんの本を紹介されたのです。読む前に、私の探していたのはこの言葉だったのだと、題名にドキドキするほど、うれしくなっていました。

そんなにも感動しましたのは、はじめて担任を離れ、三百五十名という人数からくる様々な制約、バス通

▼芝離宮のふじ棚の前で

左から二人目、三人目がせいじくん、ふみちゃん、その後ろが私。

年長さんが六人いて、合わせて「エイトマン」でした。



園がほとんどという園に身を置き、つくづく「せいちゃん、ふみちゃん、さおちゃんと過ごしたあの神明幼稚園時代は、今の私からは、夢の中の生活だった」とアルバムを見ては思っていたからです。

それに加え、私は「幼稚園における生活は、いかに子どもの思いをふくらませかねていくかに他ならない」と考えていま

したが、これは松井さんの題名をお借りして言うなら、「幼稚園時代は夢の中」という思いだったのだと気付かされたからだと思います。その夢の中のような生活のできた神明幼稚園は、JR浜松町駅から五分のところであり、古くからの商店が残っているところです。

三人（ふみこ、せいじ、私）で夢の中のような園生活を送れたのには、たくさんの恵まれた環境があったのですが、今回は、この「古くからの地元の商店」の方たちの話をしたいと思います。

大和屋さんのおばさんは三人で買い物に行くと、「かわいいわねー。先生、自分の子どもみたいでしょ」「今度は何作るの?」といつも声をかけてくれ、おじさんがいればニコニコと見ていてくれました。このおじさんは神明小同窓会長さんでした。

よく行くお店はあと二軒あります。八百赤さんと森電気屋さんです。



八百赤さんではウサギやニワトリの野菜をもらうのですが、ネコを飼っていて、ある日、「こっちにネコの赤ちゃんがいるよ」と、狭い路地に連れて行って見せてくれました（私は入れませんでした）。このあとは、ここを通るたびに必ず路地をのぞいたものです。「ネコ、いるかなあ」と。

森電気屋さんではダンボール箱をもらうのです。本当によくダンボール箱を使いました。「神明幼稚園ですけど、ダンボール箱ください」と行くと、「これがいいか」「あれがいいか」と選んでくれたり、「他の幼稚園からお友達送ってもらえ、このダンボール箱で」と冗談を言われたり……。

地元商店の、言うなれば全く赤の他人の大人に、「かわいいわね」という思いやまなざしにかこまれていたことは、ふみちゃん、せいちゃん、さおちゃんの生活を幸せにしていたと思います。

(まこと幼稚園)



子どもの本から

秋風が教えてくれた木の秘密

美谷島いく子

『グレイ・ラビットのおはなし』や『時の旅人』などの素晴らしい作品で知られるアリソン・アトリー。彼女の五十年前に出版された本の中から、珠玉の六編を選び、邦訳した短編集『西風のくれた鍵』に、最近出会うことができた。この表題作には、同時代に生きた宮沢賢治の作品と共通する美しいイメージが、散りばめられているのに驚いた。

表題作「西風のくれた鍵」は、森の木々を渡る西風か

らの謎掛け声を、耳を澄まして聞いた、幼いジョン・バ
ンチングの物語である。

アリソンは、この作品で、落葉し、孤高に聳えている
物言わぬ木が、年輪の一番内奥に隠し持っている「木の
秘密」を、優れて美しく解き明かしてくれた。

木の秘密を解く際に用いる「西風のくれた鍵」とは、
晩秋に西風が木々をゆさぶり、謎掛け歌を唱えながら、
地面に投げつけていった、木の枝に付いている、カエデ

の実、トネリコの実、カシの実（どんぐり）のことである。ジョンはその木の実を拾って持ち帰り、夜、炉端で、樵である父ちゃんに木の中に何がつまっているか質問する。「芯まで、ぜんぶ、木だよ……」「……強くて、かたい。だから、トネリコで、レーキやまたぐわをつくるんだ。トネリコのみきの幹は灰いろで、すべすべしているから、すぐわかる。それに、まきにすりゃ、このうえなく、よく燃える！ 暗がりでも、トネリコは、葉っぱが、水が流れるようにゆれるから、おれにはわかるよ」。外側から見える木の生命いのちの有り様と、木からの恵みを語る父ちゃんの言葉を聞き、ジョンは謎をめぐって思いを廻す。

『水仙月の四日』の赤毛布の子どもが、ヤドリ木の赤い実のついた枝を大切に持ち歩いたことにより、雪童子の心が動かされ、宇宙の仕掛けが一寸狂ったように、小さいジョンが、木の実の枝を拾い、大切に思いを廻すことにより、木の実の鍵で、木の幹の一部が、カチリとあい、木の秘密を知ることができた。無力に見える小さい

子どもが、決然と西風からの謎に挑み、無用に思える営みに暮れたことにより、神異が起ったのだ。

幹に各々の実の形にあった鍵穴を探し、木の実の鍵を差し込む所は、鍵社会である西欧の作品らしい。しかし、鍵があいても、すぐに木の秘密がわかる訳ではない点が、アリソンたる所以である。ただ眺めているだけでは、その小さな穴（戸棚）は、空っぽで、木の秘密は、何も明らかにならない。光、音、肌触り、暖かさを、「こすったり」「触ったり」して感じ取ろうとする時、木の秘密は、初めて明かされるのである。これは、四マイル離れた隣村の小学校に通う為、アリソンが早朝や夕暮れにも通らなければならなかった、イングランドの「暗い森」での原体験によると思われる。

「木の秘密」とは、幸福そうなカエデは、夏の日のひとかけら、妖精の木トネリコは、気持ちのよいあふれる程の音楽、樹齢五百年のカシは、五百年昔の若かった頃の日々を、隠し持っていること。『時の旅人』で、少女ベネロピーにとっての避けられない時の到来を描いたアリ

ソンは、この物語では、少年ジョンが、木の内奥に見つけた、木の生命の源となる、流れ去ることのない時間を描いた。木の秘密は、西欧の作品には珍しく、一吹き西風で、扉が閉じられ束の間の内に消えてしまう。その故に、木の秘密は、彼の心に、永遠の透き通った輝きを放ち続けるだろう。

私は、この物語を初めて読んだ時、幼い日の伊勢湾台風の翌日のことを思い出し、私のしたことは、正にこれだったのだと思った。昨夜の大嵐は嘘の様な高い青空の下、大人は、近所の被害に心を痛めているのに、幼い私は、なんだか楽しくて、裏の林の中で、台風のくれた実（鍵）で一日中、遊び惚けていた。台風は、普段は天に近い高い梢にあって、小さい私が見上げるだけで手に取ることができない、朱色の辛夷（こぶし）、真赤な花木、いがいがの朴や栗の実を、私に、置き土産として、ばらばらと残してくれていたから。

イーハトウの森を吹き渡る、透き通った風を、しばしば描いた賢治は、秋風を「ざあざあ、ごうっ、どう」と

オノマトペで表現した。イングランドの森を吹き渡る、晩秋の西風を、アリソンは、「チャリンチャリン、ひゅうひゅう、カタカタ」とオノマトペと共に、謎掛け歌を唱え、人間が動作をするように擬人化して表現している。

「なぞなぞかけた　といてみる

おれのポケットにゃ　鍵（かぎ）がある……」

アリソン世界の扉は、突然、西風から仕掛けられたこの「謎掛け歌」によって開かれる。

英語のKeyには、「鍵（かぎ）」と「カエデの実のような羽のついた実」の意味があることから、「Key」と唱えることで、二つの同音異義語をイメージする、言葉遊びの面白さから、ジョンの謎解きは始まる。英国では、マザーグースの中で、「謎々」は一つの類に分けられている程、大きな部分を占め、今でも母から子へ伝えられ、楽しまれていくという。

母から子への謎掛け声は、甘やかで優しいが、西風からジョンへの唱え声は、金切り声や力強い声で叫んだ

西風のくれた鍵

アリソン・アトリー 作
石井桃子・中川李枝子 訳



◀ 『西風のくれた鍵』 アリソン・アトリー 作

石井桃子、中川李枝子訳 岩波書店 一九九六年

り、声をはりあげたりと、強く荒々しい。そして、西風の謎掛けは、「髪の毛をねじるように引っばったり」「どっともどつてきておそいかかったり」「なぐりつけ、ぼうしをやぶの中へ吹きとぼしたり」と、乱暴で攻撃的な動作を伴っている。

西風からの謎掛けの、強く力ある言葉の繰り返しと、いたずらな動作こそが、この物語の魅力であり、物語

を、先へ先へとざわめき立たせ、謎解きの原動力となっている。ジョンも西風の勢いやリズムを了解し、西風と自由に遊び出し、謎の返答も活発になってゆく。

アリソンは、似たストーリーの三種の木の物語を、三つ並べ置いた。各々の秘密を内に秘めた三本の木は、対になったり、響き合ったりしながら、これから成長してゆく、小さなジョンの傍で、個性的な木の生命の有り様を、静謐に謳っている。

(舞々同人)

心に添う

田中三保子

でもない、がまんする

四歳の五月のことである。

クラスにはさまざまの子がいる。わずかの間にお互いに分かりあえるようになる子もいれば、長い期間かかってやっとなじみあえるようになる子もいる。一緒に生活した時間はたくさんであっても、私にはよく分からないものを内に抱えていると思われ、る子もいる。できればそれを理解し、気持ちに寄り添った保育をしたいと願う。

私が子どもの要求に応じて携帯電話を作っていると、A子がすっと脇に寄ってきた。机の上の腕時計のひとつを手にとって、じっとながめている。そういえば、A子にも一番最後に頼まれて腕時計を作っ

たけれど、取りにこなかった。あの時は、ひとつ作ったら次々に頼まれた。忙しさにまぎれて名前を書かなかったので、どれが誰のものかわからないまま三つが残った。必要になったら取りに来るだろうと、三つともそのまま机の上に置いておいたものである。

あんまりしげしげとながめているので、何を言われるのだろうかとちょっと身構えていると、A子は「これ、A子のじゃない」と言った。また文句を言われるのだろうか、名前を書いておけばよかったと後悔していると、「A子のは、ここが白くないの」と文字盤を指さした。なるほど、ピンク色に塗られた文字盤の右はじがわずかに塗り残されている。A子のこういう指摘はたいがい当を得ている。きつと白い部分がないように丁寧に塗ったのであろう、それを誰かに間違えられてしまった、悔しいに違いない、でも今さら探すのも難しいし、困ったなあ、と

思いめぐらしていると、思わぬことが返ってきた。「でもない、がまんする」。私はほっと胸をなでおろした。「誰かが間違えちゃったのね。ごめんなさい。でも、よかった、そう言ってくれて」。塗り残しがやはり気になっているようなので、「このところ、ちょっと塗ってみる」と言うと、「ふーん」という返事が返ってきた。そして、ピンクを塗り足してから腕時計を引き出しにしまったようであった。

A子は三歳の入園後しばらくすると、「いい子の衣を脱ぎ捨てたようにいろいろなことをした。周りの様子をとてもよく見ていて、誰かが紙粘土のごちそうを金魚鉢に入れば、にこっと笑って自分もやった。止められ



ても止められても何度でもする。あまりのことに止める手に思わず力がはいると、キッと私をにらみつける。

「何でせんせいはA子にはそうやるの」。他の子どもとの私の微妙な対応の違いを敏感に感じとり、私の心の中まで見透かしたような問いかけに、ことばに詰まることもたびたびであった。

四歳児になってからは、A子が以前より穏やかになってきたような気はしていた。私のことばがはねかえされないことも増えてきた。しかし、こんなにも素直にA子とやりとりができたのはおそらく初めてである。自分に添うことを要求し続けてきたA子が、ようやく他人に心を添わせられるようになったかと、この時、私はとても嬉しかった。

私のイヤリング、どうしたの

二週間ほど後のことである。

部屋の入り口に入ってくるなり「せんせい、私のイヤリングと腕輪、どうしたの」とA子はなじるように言った。

B子がセーラーマーズのイヤリングと腕輪を作ったのを見て、A子が「イヤリングと腕輪を作って」と言ってきたのは、一週間以上も前のことである。

「丸いのがいい」と言うので、紙に丸を三つ書いて渡すと、色を塗って持ってきた。そして「せんせい、あとやっという」という様子で私に手渡したとき、今までずっと知らん顔だったのである。

私としては、A子の目の前で、A子と一緒に作りたい。子どもたちが帰った後、机の上に置かれたままの三つの丸をながめては、私は毎日思索していた。あの時あれだけ強い調子で要求してきたのに、一体これは何なの、と、ちょっとむっとした気持ちもあって、このままA子の引き出しにしまっておくかとも思った。もう一度A子にどうするかた

ずねてみるべきだろうか、それとも、A子の気持ちに添って作り上げておこうかと思ひ悩んだ。結局、私は、自分で作っておくことに決めた。それは、私が日頃、A子の中に大人への強い反感を感じていたからである。大人を信頼してもらうには、A子の場合には、何はともあれこちらがA子に添うことが必要なかもしれない。腕輪はリボンの色がわからなくて作れなかったので、イヤリングだけを完成させ机の上に置いておいた。

「どうしたの」と問われた時、私は窓側の机でお面を描いていた。なじるようなものに、相変わらずねえ、と思わず苦笑すると同時に、やっぱり作っておいてよかったです。そこにできているわよ」と答えると、A子は机の上を探して見つけたようであったが、今度は「腕輪はどうしたの」と責められた。「リボンの色がわからなかったからできなかったの。お面が終わったら作りましょう。少し

待ってて」と答え、様子を見ていると、A子はようやく穏やかな表情になり、私を待っててくれた。腕輪を作り、A子の腕につけると、A子はそれをすぐにはずし、イヤリングとともに引き出しにしまってしまった。私はA子が使いたいからせっついてきたと思い、急いで作ったのに、はぐらかされたような気持ちになって、いつまでも釈然としなかった。A子は私を試したのだろうか。それとも、単に大人を信頼していかないのだろうか。

私はA子の内に、大人への強烈なまでの反感感情を感じ続けてきた。私に、自分に添うことをどこまでも要求し続けてくる。それは、今まで自分が大人にされてきたことを、今度は私に向けているように思われた。これがA子なりの自分探しのやりかたなのだろうと思ひながらも、あまりにも私の意向が無視され続けたり、キッと反感されると、ついむかつとして、語気が荒くなり、押さえる手に必要以上に

力がこもる。それをA子は敏感に感じとり、また私に背を向ける。お互いに近づいたり離れたりを繰り返しながらようやくここまできて、少しはふつうにやりとりができるようになったと思ったのに、やはりそう簡単にはいかないのであろうか。

A子は今までひとりであることが多かった。周りのことはよく見ているのに、子どもたちとはあまりかわろうとしない。しかし、大人には違っていた。かまってくれそうだとみると、すぐに自分から近づきかわいらしげにふるまう。それで関心が引けなければ、後は知らん顔である。

そんなA子が、少しずつ友だちに積極的に働きかけるようになったのはこのころからである。そして、だんだんに友だちという時間が長くなっていた。けれども、かたくなに自分を主張し譲らなかつたりして、相手が離れたり自分で抜けたりと、ひと

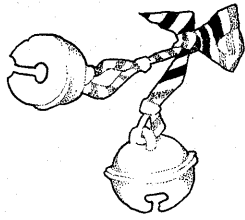
りの時間も多かった。大人ばかりでなく子どもに対しても、相手が自分に合わせることを要求しているように私には思われた。

私に対しては、表だった反発は少なくなったけれど、聞いているようでやらない、言われたことをわざと長い時間かけてするなど、やはり反発は続いていた。

もう一回だけやりたい

前のことからほぼ一年後の、五歳の五月のことである。

ままごと道具の大半を移動して大きなうちわを作って遊んでいたA子、C夫、D子、E子に、私は片づけの声をかけてから、遊戯室に行った。戻ってみると、相変わらず盛大に遊びが繰りひろげられている。A子は、この遊びの前にF子とテラスでままごとをしていた。それがそのままになっている。



ちょうど室内にいたF子に、片づけるように言う
と、ちよつと渋ったが、出かけていった。私は、まる
で片づける意志なく遊び続けるA子にも、テラスの
ままごつとを片づけるように促した。A子が外ままご
つとを始めることは多いが、きちんと片づけたことは
ほとんどない。「だってFちゃんも遊んだ」「Fちゃ
ん、今行ったわよ。Aちゃんも行きましょう」「A
子、ここ片づける」「でも、Fちゃんひとりじゃ大
変だから、一緒に片づけてきましょう。ここはD
ちゃんたちでできるから」。有無を言わさない私の

語調に、A子は

渋々出ていった。

砂場の片づけを

手伝いながら、遠

目に見ていると、

どうも遊んでいる

ようにみえる。や

れやれ、やっぱり行かなくちゃだめかな、と思つて
いると、A子がふらふらとテラスから出ていった。

花びらを拾いに行つたようだ。テラスにいつてみる
と、F子にG子も加わつて、作りかけのごはんを再
び作りだしていた。楽しそうだが時間が時間であ
る。きっぱりと促すと、F子がさつさとやり始め
た。A子にも持つていくものを頼もうとするとぬら
りとかわされてしまった。さらに強く言うと、よう
やくばけつをひとつだけ持つてくれる。しかし、そ
れも道具入れには戻らず、部屋の入り口に放り出さ
れたままになっていた。

部屋に戻ると、A子の姿は見えない。片づけを手
伝っている、いつの間に入り込んだのだろうか、
すみっこのピアノの下にいた。みんなが片づけてい
るのに、ひとりトライアングルを手にしている。さ
すがにむつとして、A子に近づき「Aちゃん、せん
せいもう何回もお片づけて言ったわ」と語気強く

言うと、「もう一回だけやりたい」と哀願するよう
に言われた。まったくもう、身勝手なんだから、
むっとしたまま私はすぐ脇にあったトライアングルの
袋を取り、A子の目の前に差し出した。怒りをぶ
つけてもいきりたたせるだけのようないまま、何
と言おうかことばを探して見つけれないまま、私
は袋の口を開け、中を指さした。するとA子は素直
にトライアングルを中に入れた。その様子に私の気
持ちがすっとゆるんだ。今度は穏やかに、A子の持
つ棒を指さすと「だって、わかんない」と言った
が、入れる場所を指し示すときちんと入れてくれ、
一緒にしきることができた。時間にしたらごくわず
かのやりとりであったが、お互いに心を重ね合わせ
られたような気がした。相変わらずA子の中にくす
ぶり続けるものを感じつつ、時々こういう時がもて
ると、私はとても嬉しくなる。

私がA子に添うことができたと感じたとき、A子
も私を受け入れてくれたように思える。そうでない
ときは、反発されるか、最近はのらりくらりとかわ
される。A子のわがままにつきあわされているよう
な気もするが、A子はそれほど大人不信をいまだ
に抱えているようにも思える。自分に心を添わせて
もらう体験が少なければ、他人に心を重ね合わせる
ことは難しい。他人に添うことを強いられ、そのた
めに努力を重ねてきたとなればなおさらであろう。
そうは思っていない、いまでもむかつくときは
多く、保育者としての後悔も少なくない。しかし、
そういったことも含めて、お互いに寄り添いあえる
ように、これからも試行錯誤を続けていきたいと
思っている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

ある日の育児日記から

(81)

佐藤 和代



有が少しずつ、文字を覚え始めました。あれ、読めるのかな、と思ったのは数か月前。たばこのポスターの「ウルトラマイルド」という文字を見て、「あつ、ウルトラマン！」と叫んだのです。やれやれ、男の子だなあ。

圭が文字を覚えたときは、まっとうに(?)ひらがなからだったので、何となく子どもはみんなそうだと思っていました。小学校でもひらがなから教えるしね。でも有は、かたかなの次は、「川」とか「田」とか、漢字を覚えてしまった。まあ、子どもは、文字にはひらがなとかたかなと

漢字がある、なんてこと知らないわけだから、覚える順番がめちゃくちゃなのは当然なのかも。圭はどうしてひらがなから

だったのか、不思議なくらいです。「これ何て読むの?」「○○って書いて」とうるさくまとわりつくのは圭も有も同じ。しばらくこれが続きそう、面倒ですが楽しみでもありません。圭は「み」にてんてんで「び」って読む?」



圭は交換日記を始めました。うわーなつかし!!

なんて聞いてきて私をうならせましたが、有もやっぱり同じことを聞いてくる。「ねえ、「む」にてんてんで「ぶ」でしょ?」...うー不思議だね。

編 集 後 記

今月から、大多和先生の「夢の日々」が始まりました。園児が二人しかないクラスでは、どんな保育が展開したのでしょうか。

*

九月に入り、一年保育の年長のLが持ち帰った「紙芝居」を見て、私は驚きました。

夏休み前に、「S君が紙芝居を作っているよ。ぼくも作りたいな」と言うのは聞いていました。でも、私にとっての紙芝居作りとは、お話を作る、それを数枚の絵にする、そのお話を文字で書く、それに加えてさらに、そのお話は見える絵の一枚前の絵の裏に書くという複雑さもある

というものです。私は文字を書くことを楽しみ始めたばかりのLにはそれらの過程をこなして作り上げるのは無理だと思っていました。

ところが、Lの初めて作った紙芝居は、一枚の紙の表に絵が、その紙の裏にそのお話が紙面いっぱいにもたは二文で書いてある、それが数枚あるという単純なものでした。やがて、その話にも続編ができました。そのシリーズ③では、表の絵をみせながら裏のお話を読むことができるところになっていました。できあがった作品で友達や先生と遊んでみて自分のものと市販品の違いに気づいたのでしょうか。

五歳児のLにも紙芝居を作ることができたのは、彼が自分の力でやりたいことをやっていったからだと思います。

(A)

幼 児 の 教 育

第九十六巻 第九号

(一九九七年九月号)

定価四六〇円(本体四三八円)

発行 平成九年九月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五一一二一一

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四一三

☎〇三一一五三九五一六六一三(営業)

☎〇三一一五三九五一六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇二一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

◆ふしぎがわかる しぜん図鑑

幼児の探求心を育て、小学校の「生活科」にも役立つ図鑑です。調べる、確かめる、知ることが楽しくなります。豊富なイラストと写真で見やすく構成されています。

全10巻 A4判 116頁

監修・東京大学名誉教授 水野丈夫



①こんちゅう

元東京都多摩動物公園園長 矢島 稔 監修

②どうぶつ

元東京都上野動物園園長 増井光子 監修

③しょくぶつ

園芸研究家 浅山英一 監修

④みずのいきもの

国立科学博物館 武田正倫 監修

⑤とり

東邦大学理学部 長谷川 博 監修

⑥ひとのからだ

瑞江大橋こども診療所 岡本 暁 監修

⑦きょうりゅうと おおむかしのいきもの

元国立科学博物館 小島郁生 監修

⑧ちきゅう かんきょう

放送大学教授 奈須紀幸 監修

⑨うちゅう せいぞろい

五島プラネタリウム館長 村山定男 監修

⑩はる なつ あき ふゆ

理科教育研究家 中山周平 監修

各定価 本体2,000円+税

◆ふしぎをためす かがく図鑑

自分自身でやってみるための図鑑です。美しいイラストと豊富な写真で飼育や栽培、自然と仲良くなるための遊びなどをわかりやすく紹介します。

既刊4巻 A4判 116頁

監修・東京大学名誉教授 水野丈夫



①いきものしいく

富士自然動物園協会 今泉忠明/国立科学博物館

武田正倫/元多摩動物公園園長 矢島 稔 監修

③かがく あそび

千葉県立現代産業科学館 村松伸弘 監修

②しょくぶつさいばい

テクノ・ホルティ園芸専門学校 肥土邦彦 監修

④しぜん あそび

理科教育研究家 中山周平 監修

各定価 本体2,000円+税

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館創業90周年記念出版

21世紀の保育を見つめて、今、保育の基本を問い直す

幼稚園教育要領や保育所保育指針の中で示されている「保育の基本」は、さまざまな形に受容され実践に移された。しかし、そこに誤解に基づく混乱はなかったか。本シリーズは、具体的な事例を通してその混乱をただし、あるべき保育の姿を提案します。

保育の基本〈全6巻〉



- ◆第1巻 環境を通しての保育とは
- ◆第2巻 生活と遊びを通しての保育とは
- ◆第3巻 個と集団を生かす保育とは
- ◆第4巻 自由の中で規律が育つ保育とは
- ◆第5巻 発達に合わせて援助する保育とは
- ◆第6巻 総合的指導による保育とは

編集委員 森上史朗（青山学院大学教授）
高杉子子（子どもと保育総合研究所）
今井和子（東京成徳短期大学助教授）
後藤節美（別府市・石垣幼稚園長）
田中泰行（東京都・向南幼稚園長）
渡辺英則（横浜市・港北幼稚園副園長）

●今特に問題となっていることを各巻のテーマに

保育現場で、今特に問題となっていること、誤解されていること、混乱していること、見直されつつあることなどを取り上げ、各巻のテーマにしています。

●子どもに寄り添う保育を

「子どもから」という発想を軸に、子ども理解、一人一人を見る、集団生活の意味や表面的な行動の奥にある意味を見る、ということを考えつつ、子どもに添った保育のあり方を考えていきます。

●これからの保育への提案

次回に予想される教育要領の改訂をも視野に入れながら、これからの保育のあるべき姿を考察し、どう実践していったら良いかを事例をもとに具体的に提案していきます。

判型/A5判・頁数/各巻216頁 セット定価：本体12,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館